

政党の機能低下と政党政治の変容 — 有権者の政党離れと新型政党の登場 —

金丸裕志

<目次>

はじめに

1 政党の機能低下

(1) 政党の2つの機能

(2) 政党の利益代表機能の低下

2 有権者の政党離れ

(1) 有権者の政党離れの現状

(2) 社会的要因と政治的要因

3 新しい政党の登場

(1) 新左翼政党

(2) 新右翼政党

おわりに

はじめに

前著（金丸2008）において私は、政党の定義において有権者の「利益集約・意思伝達」を目的とする政党と「政治権力の獲得」を目的とする政党の二つの観点があることを指摘した。これらは、普通選挙制度が広く定着した現代の民主主義体制においては、必ずしも相反するものではなかった。ところが、政治権力獲得のための選挙での「得票の最大化」は、必ずしも有権者の利益を代弁することによってのみ実現されるとは限らない。実際、近年の政党組織研究は、政党が選挙での得票の最大化を最優先の目標とすることによって、有権者の利益代表という目的を等閑視してしまう可能性が高くなってきていることを指摘している。

人間・社会学系社会科学研究室

こうした状況は、政党組織研究のみならず、本稿の2でもみるように、有権者の政党支持や政党帰属意識などの計量的な研究によっても、この20年ほどの間に明らかにされてきている。こうした状況は、政党研究者によっては、「政党の危機」として、頻繁に論じられてきたし (Daalder, 2002; Daalder, 1992; Mair, 1998; Andeweg, 1996; Poguntke, 1996; Reiter, 1989)、論者によってはこれを「民主主義の危機」と見る向きもある (Pharr and Putnam eds., 2001)。たしかに、現代の民主主義が代議制民主主義を基本としており、そのメインアクターが政党であることも考え合わせれば、こうした「政党の危機」は「代議制の危機」さらには「民主主義の危機」ということができるであろう。

本稿は、こうした問題意識に立ち、まず1で、政党の「機能」に着目して、そのさまざまある機能が「選挙競争機能」と「利益代表機能」という二つの大きな機能に集約できることを示し、そのうちの「選挙競争機能」が優先されることによって、有権者の「利益代表機能」が弱体化しつつあることを指摘する。次に2で、こうした政党の「利益代表機能」の低下がもたらしつつあると考えられる、政党の有権者からの乖離の現状分析を、いくつかの研究を取り上げて紹介する。そして最後に3で、こうした既成政党の機能低下と、それによる有権者の政党離れが、環境政党や極右政党といった新しいタイプの政党の登場と関係していることを示す。

1 政党の機能低下

(1) 政党の2つの機能

政党の機能は数々の論者によってかなりの数が挙げられている¹。この中で、各地域の広い範囲にわたる事例を含んだガンサーとダイヤモンドの比較研究では、次のような7点の機能が挙げられている (Gunther and Diamond, 2001)。

選挙過程における機能

- ①候補者指名、②選挙動員、③争点構築

社会集団との関係における機能

- ④社会代表、⑤利益集約、⑥政府の形成・維持、⑦社会統合

ここですでに7つの機能は大きく二つに分類されているが、同じ共同研究の中でバルトリニとメアはこれらを、「代表機能 (representative function)」と「手続き・制度的機能 (procedural or institutional function)」の2つに分類している (Baltorini and Mair, 2001: 332)。

拙稿（金丸2008）でもすでに指摘したように、これまでの政党組織研究では、組織としての政党が優先する目標に応じて二つの見方が存在してきた。ひとつは、選挙での得票最大化を優先目標とし、これによって政治権力を獲得しようとする政党。そしてもうひとつは、イデオロギーや政策の一貫性を重視し、それらのイデオロギーや政策を支持する有権者の利益代表を優先目標とする政党である。政党の機能も、こうした政党組織の二通りの見方と並行して存在していると考えられる。すなわち、一方で選挙での得票を最大化する諸機能と、他方で支持する有権者の利益を代表し政治決定に伝達する機能である。バルトリーニとメアの二つの機能分類はこれに対応しているといえるであろう。またローソンはすでに、「政党機能の2つの側面」として、「大衆有権者側の必要性にもとづく政党機能」と「権力追求者側の必要性にもとづく政党機能」があることを指摘している（Lawson, 1968: 17）。さらにキツェルトも、政党組織内には「政党競争の論理」と「支持者代表の論理」が存在するという（Kitschelt, 1988）。これらも、ここでいう「選挙競争機能」と「利益代表機能」と平行である。ここでは、これら二つの主な政党の機能を「選挙競争機能」と「利益代表機能」と呼ぶことにしたい。

（2）政党の利益代表機能の低下

このように、政党のさまざまな機能を「選挙競争機能」と「利益代表機能」とに大別して考えると、近年の既成政党が選挙での得票最大化を優先目標とするようになったことで、「選挙競争機能」は強化されつつあるといえる。ところがこれに対して、「利益代表機能」のほうは低下しつつあるということが多くの政党研究によって指摘されている。

バルトリーニとメア（Baltorini and Mair, 2001）は、利益団体や社会運動といった他の政治集団の発達およびマスメディアの発達によって、市民は政党を経由せずに利益表出することが可能になったため、政党の「代表機能」は衰退していると指摘した。その一方で、「手続き・制度的機能」のほうは衰えるどころか強化されてきているという。そのうえで、近年において政党の制度機能がむしろ強化され、また保護されてきていることが、まさに政党の不全の原因であると指摘した。

この、バルトリーニとメアの議論は、「カルテル政党」の議論にもとづいているといえる（Katz, and Mair, 1995）。カツツとメアは、政党組織モデルの変遷が、政党の選挙への対応にもとづいており、それゆえに、普通選挙制度導入以前の幹部政党から普通選挙制の導入とそれに伴う有権者層の拡大によって大衆組織政党への組織革新が行われたというデュヴェルジェの議論に沿って、より幅広い層の支持を獲得するためにキルヒハイマーの見出した包括

政党が現れ、そして近年では、政治資金の国家助成制度や政党にたいする国家規制が広く導入されるようになったため、政党はより確実な票の獲得を目的として、互いに「カルテル」を結ぶことで、むしろ有権者から離れてきていると指摘した。つまり、近年の既成政党が、選挙競争機能を拡大させる一方で、有権者の利益代表機能は低下しつつあることを指摘したものであった。

こうした議論に対して、その分析枠組みとしての欠陥の指摘 (Koole, 1996) や実証的根拠による反論 (Kitschelt, 2000; Pedersen, 2004) がある。しかし、近年の既成政党が陥っている機能不全の問題を指摘するものとしてはきわめて示唆的であり、それゆえに多くに論者が関心を寄せている。バルトリーニとメアの議論は、こうした「カルテル政党」の議論を、政党の機能という面から再確認するものであるといえる。

こうした、政党における利益代表機能の低下は、代議制民主主義との関係でしばしば問題として取り上げられてきた。そのなかでもローソンはいち早く、彼女のいう「大衆有権者側の必要性にもとづく機能」における政党の役割の低下を指摘し、こうした代表機能における政党の機能低下を、市民社会と政党との「連繫」すなわち「リンケージ」の衰退であるとして議論した (Lawson, 1968; Lawson ed., 1980)。また彼女は、メルクルらとの共同研究『政党が失敗するとき』 (Lawson and Merkl eds., 1988) のなかで、「政党の失敗」を「リンケージの失敗」として位置づけ、政党と市民社会との間の「リンケージ」の弱体化によって、既成政党への支持が減少するとともに、代替組織への支持が増加すると指摘したうえで、各国の事例を紹介している。

さらに近年のビーゼンとコペッキー (Biezen and Kopecky, 2007) の研究は、ローソンが提唱した市民社会と政党との「リンケージ」の議論と、カッツ＝メアの「カルテル政党」の議論とを融合させたものであるといえる。すなわち彼らも、「政党と市民社会とのリンケージ」が弱体化してきていることを指摘した上で、その一方で政党はむしろ国家との連繫を密にしつつあることを指摘し、近年における市民社会＝政党＝国家の三者の関係の変化を検証した。その結果、政党の「手続き的役割 (あるいは制度的役割)」が、未だ健在で、ともすると増加しているかもしれないにもかかわらず、「国民代表機能 (あるいは社会機能)」は低下してきていると指摘している。

このほかにもいくつもの研究が、既成政党の「利益代表機能」の低下を指摘している。政党と市民社会との関係の希薄化は、従来政党との関係が緊密であった利益団体や労働組合といった支持団体との関係の衰退にもっとも顕著にみられる。ポグントケ (Poguntke, 1998) は、特定の利益集団と緊密な関係を持つことが、あまり選挙で価値を持たなくなってきたた

めに、ヨーロッパでは政党とその支持団体とのリンケージが崩壊してきていることを明らかにし、政党の「利益集約機能の低下」を指摘している。また彼は（Poguntke, 2004）、急激な社会環境の変化にさらされ、社会との連繫を失うことにより、政党は利益集約の機能を放棄して、単に利益を「寄せ集める」ようになってきていると指摘したうえで、そのために政党は新しいコミュニケーション手段やマーケット・リサーチの技術に頼るようになってきているとも述べている。

また、欧米先進民主主義諸国の比較にもとづくファレルやホリデイとの共同研究（Webb, Farrell and Holliday eds., 2002）をまとめて、ウェブ（Webb, 2002）は、政党の機能は、「ガバナンス」「人材調達」「利益集約」にかんしては健在であるものの、「利益伝達」「コミュニケーション」「参加」の機能は他の政治アクターすなわち単一争点集団やマスメディアにとって代わられていると結論している。

こうした政党の「機能」の変化は、政党という組織の「目的」の変化となって現れる。スキヤロウ、ウェブ、ファレル（Scarrow, Webb and Farrell, 2000）は、戦後の時代を通して、政党は大衆統合を目的としたものから選挙競争を目的としたものへと変化してきたと述べている。さらにファレルとウェブ（Farrel and Webb, 2000）は、これを政党の「プロフェッショナル化」と呼んでいる。彼らは、選挙でより多くの票を獲得するために、政党の選挙活動が新しい技術を取り入れたり、広報の専門家やコンサルタントを利用することでプロフェッショナル化してきていると指摘している。

こうした政党組織の機能や目的の変化は、パネビアンコ（Panebianco, 1988, esp. ch. 12 and 14）の包括的な政党組織モデルにかんする研究における「官僚的大衆政党」と「専門職的選挙政党」という2つの政党組織モデルによって説明されるであろう。彼は、政党の制度化にともない、「官僚的大衆政党」から「専門職的選挙政党」へと変化しつつあることを指摘している。

以上のように多くの研究によって、伝統的な既成政党を中心として、政党の目的が、利益集約や意思伝達、大衆統合といった目的から、選挙での得票最大化という目的へと変化しており、それにともなって政党の「カルテル化」や「プロフェッショナル化」が生じた結果、政党の「選挙競争機能」が強化されつつある一方で、逆に「利益代表機能」は低下しつつあることが指摘されている。つまり、近年における政党の機能低下とは、有権者の利益代表機能の低下であるということができるのである。

そしてまさにこのことが、有権者の政党離れを引き起こしているのだといえる。次の2では、有権者の政党離れの現状を、有権者の政党帰属意識や政党黨員への加入、投票率といっ

た、いくつかのレベルにおける有権者と政党との繋がりを示す指標をもとに検証した研究の成果を取り上げて概観していくことにする。

2 有権者の政党離れ

(1) 有権者の政党離れの現状

はじめに、有権者の政党離れを総合的に検証したいくつかの研究を取り上げていくことにする。まず、ポグントケ (Poguntke, 1996) は、「政党の危機」にかんする一連の議論をふまえた上で、実際に政党が危機的状況にあるのか、そしてどのような危機的状況にあるのかを検証しようと試みた。そしてこの検証作業のために利用可能な、操作化可能な指標として、「政党帰属意識の衰退」「政党への固定的支持」「投票率」「政党支持の不明確さおよび躊躇の増大」「政党员数の減少」「反政党的政党」を取り上げ、欧米の先進民主主義諸国13カ国を対象としてこれらのデータを検証した。その結果、1960年代から90年代初めまでの期間は全体として劇的な変化はなく、むしろかなり安定しており、西欧民主主義諸国で全体的な政党の凋落や反政党感情の興隆はみられなかったと結論している。ところが同時に、80年代以降の変化はより顕著になってきたことも示されている。とりわけ、選挙での棄権や反政党的政党への支持、そして選挙民の政党への不支持の指標がいくつかの国ではたいへん顕著になりつつあるという。このようにポグントケは、逡巡を含みながらも、1980年代以降にいくつかの西欧諸国で現れつつある既成政党への有権者の反感から、政党政治や民主主義政治に反対する政治エリートの出現につながる危険性があると指摘している。

次にダールトンとワッテンバーグらの共同研究 (Dalton and Wattenberg eds., 2000) は、先進工業諸国で政党の衰退はほんとうに起きているのか、もしそうであればこうした政党の衰退は現代の民主主義諸国にたいしてどのような示唆をもたらすのかを明らかにしようとした。彼らは、政党と市民との関係 (Dalton, 2000) や有権者の党派性 (Dalton et.al., 2000)、国政選挙における投票率にかんする個別の研究 (Wattenberg, 2000) から、政党帰属意識が比較的長期間にわたり一貫して低下してきているのに加えて、投票率はここ10数年の間に急速に低下しつつあることを指摘している。さらに、政党帰属意識が低下してきているのと同様に政党の党員数も減少してきていることが明らかになったことから (Scarrow, 2000)、市民が政党から離れてきていると結論しており、しかも政党の行動はこうした傾向を助長してきていると指摘している (Dalton and Wattenberg, 2000b)。

さらにウェブら (Webb et.al. eds., 2002) は、ダールトンとワッテンバーグらの研究を

踏襲し、欧米の先進民主主義国を対象に、政党と市民社会との関係の変化を各国の事例分析をもとに検討している。そして、政党の「正統性の危機」の検証に際して、「政党一般への不信・無関心」「政党帰属意識の程度」「政党支持の不明確さ」「個々の政党の党員数および党員の割合」「国政選挙での投票率」「選挙変易性（ベデルセン指数）」「政党システムの分極度（ラクソ＝ターゲペラ指数）」のそれぞれの指標を検討した。その結果をまとめてウェブ（Webb, 2002b）は、政党と社会との関係はいくつもの点でしかも継続的に衰退してきていると結論している。

これらの総合的な研究の他に、個別の指標を検証した次のような諸研究がある。まず、政党帰属意識が、西ヨーロッパ諸国において低下してきていることが、多くの研究で明らかにされている（Biorcio and Mannheim, 1995; Dalton, 2000; 2002）。このうち、シュミットとホルムバーグ（Schmitt and Holmberg, 1995）は、欧米15カ国の選挙データとユーロバロメーター調査のデータを用い、政党帰属意識を主たる指標として、政党と有権者の連繫にかんする各国での通時的な変化と各国間での違いを分析した。その結果、これら欧米民主主義諸国において、各国間でその程度にかなり差があるものの、全体的な傾向として、有権者の党派性は緩やかになってきていると結論している。またダルトンの研究（Dalton, 1999）は、時系列データのそろそろ19カ国のうち17カ国の先進工業民主主義国で政党帰属を表明している人々の割合は、政党帰属の強さとともにこの25年間をとおして減少してきていることを明らかにしている。さらにイングルハート（Inglehart, 1990: 366 邦訳317頁）は、政党忠誠心の減少を証明している。

次に、政党党員数の変化にかんしては、1980年代までのデータでは党員数減少の一貫した証拠はつかめなかった（Selle and Svasand, 1991; Katz et al, 1992; Widfeldt, 1995）。しかし90年代のデータを検証したメアとビーゼン（Mair and Biezen, 2001）は、調査を行ったヨーロッパ20カ国すべてにおいて、そして一部の国においては顕著に、政党党員の絶対数は減少しているということを明らかにした。

さらに、政党と支持団体との連繫について、クーリ（Koole, 1994）は、かつて分断社会のなかで政党と利益団体や労働組合など諸団体との繋がりが強かったオランダを事例に取り上げ、これら政党と諸団体との連携が弱体化してきていることを明らかにし、これを「近代幹部政党」と呼んだ。またポグントケ（Poguntke, 1998）は、政党にとって特定の利益集団と緊密な関係を持つことがあまり選挙で価値を持たなくなってきたために、ヨーロッパでは政党とその支援団体との連繫が典型的に崩壊してきていると述べている。

最後に、ワッテンバーグの研究（Wattenberg, 2000）は、OECD諸国における投票率が

1960年代以降低下してきていることを明らかにしている。しかもそれは直線的な低下ではなく、とりわけ90年代以降に低下の割合が大きくなってきているという。

以上のように、政党帰属意識、政党の党員数、政党への固定的な支持、政党と支持団体の連繋、そして全体的な投票率の変化といった数々の指標において、政党と有権者との繋がりには弱くなってきていることが明らかにされているのである。

(2) 社会的要因と政治的要因

このように、多くの研究が、有権者の政党帰属意識、政党党員の加入、投票率といった指標を用いて、政党と有権者との乖離を明らかにしている。そして、1でみたように、こうした有権者の政党離れは、政党の機能低下、そのなかでも政党の利益代表機能の低下の結果であると説明されている。

ところが、こうした有権者の政党離れが、政党の機能低下によるものではないとする見解もある。たとえばリンス (Linz, 2002) は、失敗は政党の側にあるのではなく、大衆の価値観や信条にその原因があると論じている。確かに、市民社会の側、有権者の側の変化も見過ごすことはできない。しかし、有権者の側の変化が原因であるとしても、そうした有権者の変化に政党は適応すべきであるし、実際に政党が有権者からの支持を得られていないのであれば、それは政党が有権者の選好の変化に適応できていないことを示すものであるといえよう。つまり、投票率や党派性の低下は有権者・社会の側に原因があるといってもよいが、これらの低下が留まらないのは政党の側に問題があるといえるのである。

またローゼンストーンとハンセン (Rosenstone and Hansen, 1993) は、投票率の低下にかんする研究が有権者側の視点からしか行われていないことに着目し、逆に政党や政治家の側からの分析も併せて行う試みを行った。その結果、教育水準の向上はたしかに投票率を上昇させるものの、党派性の低下や政党の有権者動員が低下していることから投票率は低下してきており、それが教育水準による効果を上回っていると結論している。すなわち、この研究にかんしていえば、有権者の教育水準という有権者側のないしは社会的な要因よりも、政党・政治家の側の要因が投票率の低下に大きく寄与しているといえるのである。

たしかに現代の政治において有権者は、政党以外にも利益団体やロビイストあるいはマスメディアなどを通じた意思伝達や利益代表のルートを持っており、政党以外の利益代表の手段は多様化してきているといえよう。このことが有権者の政党離れを促進していることは疑いようがない。しかし、すでに触れたシュミットとホルムバーグ (Schmitt and Holmberg, 1995) は、有権者の党派性の低下が教育水準の上昇やマスメディアの役割、脱産業社会の到

来といった社会レベルあるいはマクロレベル要因からは説明されず、政党間での分極度や争点対立の強弱、議会での政党の数といった政治および政治的要因のほうが重要であると述べている。

同様に、ファレルとウェブ（Farrel and Webb, 2000）は、政党の選挙活動がプロフェッショナル化してきていることを指摘しつつ、同時に政党はより国民の意見や要求に対してより敏感になってきており、「消費者指向型 consumer oriented」になってきていると述べている。また、すでに触れたウェブの研究（Webb, 2002b）でも、政党と有権者との関係が衰退していることを指摘する一方で、政党は有権者に対して新たな適応を試みていると述べている。

このように、有権者の政党にたいする関与が低下しつつある一方で、既成政党も有権者を取り込むべく努力していることは事実であろう。しかし、にもかかわらず、有権者の政党離れは進行しつつある。このことは、既成政党から離れた有権者が、これまでにない新しいタイプの政党への支持に回っていることにも見てとれる。次に新型政党の登場についてみていくことにする。

3 新しい政党の登場

ダールトンらは1980年代、社会の脱工業化が政党システムに与える影響を論じた研究を発表し、政党システムに「脱編成（dealignment）」と「再編成（realignment）」という変化が生じていることを示した（Dalton et.al, eds., 1984）。これによれば、政党システムの「脱編成」とは、脱工業社会における社会変化にともない、有権者ないし利益集団が伝統的に支持してきた政党との関係が弱体化へと向かうことを意味している（Dalton et.al, 1984: 14）。2でみた、政党の党員数の減少、政党への忠誠心や帰属意識の低下、さらに広く見れば全体的な党派性の低下は、こうした政党システムの「脱編成」を表すものであるといえる。他方「再編成」とは、従来伝統的にある政党を支持していた利益集団や有権者層が別の政党や有権者層の支持へと変化することをいう（Dalton et.al, 1984: 13）。こうした政党システムの再編成は、政党システムの包括的な比較分析のなかで、80年代以降とくに顕著になってきた政党システムの変化に現れている（Daalder and Mair eds., 1983; Mair and Smith eds., 1990; Pennings and Lane eds., 1998; Broughton and Donovan eds., 1999; Webb et.al. eds., 2002; 的場2003、また金丸2006とくに2を参照）。

こうした政党システムの変化の中でもっとも顕著なものが、西欧諸国における新しいタイ

プの政党の出現である。具体的には、70年代以降台頭してきた環境政党、そして80年代以降台頭してきた極右政党がその代表として挙げられるであろう。これらの新型政党の登場が、ダールトンらのいうように、脱工業社会の社会経済的变化によるものなのか否かにかんしては諸説が存在する。ここでは、政党—有権者関係に着目して、これら新型政党が登場するメカニズムについて論じてみたい。

ローソンとメルクルは、ローソンの指摘する「リンケージの失敗」(Lawson, 1988)が既存政党への有権者の支持の衰退をもたらし、その反面として、単一争点の新しい政党の誕生や特殊な新しい利益集団の隆盛をもたらしていると指摘している²。またワッテンバーグは、先進諸国における投票率の全体的傾向にかんする研究のなかで、「おそらく新しい政党と政党間競争の新しいパターンが制度化されれば、投票率は回復するであろう」と述べ、新しい政党の登場や政党システムの変化が、投票率の改善に寄与することを示唆することで、政党システムの変化と投票率の変化との関係を示唆している(Wattenberg, 2000: 76)。このように、政党の有権者からの乖離は、新しい政党の出現に潜在的余地をもたらす。そこに機会が訪れれば、新しい政党が登場してくると考えられるのである。

(1) 新左翼政党

こうした新型政党として、西欧諸国でまず登場してきたのが、ドイツや北欧の「緑の党」に代表される環境政党である。これらはしばしば、「ニュー・ポリティクス政党」や「左翼リバタリアン政党」と呼ばれこともあるが、ここでは「新左翼政党」と呼ぶことにし、また次節の「極右政党」「右翼ポピュリスト政党」などを「新右翼政党」と呼ぶことにする³。

ダールトンらの研究と同様、イングルハート(Inglehart, 1971; 1977)は脱工業社会の社会経済変化が人々の価値観を変化させることで、政治に新しい現象を起こしていると論じた。また彼はのちの著書で、既存政党が階級や経済的争点を軸に成り立っているため、近年の「脱物質主義的」価値観を持つ世代の欲求に適切しておらず、また旧来型のヒエラルキー的な組織のあり方も、新しく増えつつある有権者の価値観に合っていないと指摘している(Inglehart, 1997: xiv)。

もっとも彼の議論は、人々の価値観変化が政治行動に影響を及ぼすというところまでを議論しており、それが政党政治に与える影響までは議論していない。しかし、この彼の議論の延長線上に政党政治の変化を見出す議論も多くみられた(金丸1997)。ダールトンらの共同研究もその代表的なものの一つである。こうした新しい政党や政治集団は、環境問題を単一争点とするものを中心に、「ニュー・ポリティクス」と呼ばれる(Muller-Rommel and

Poguntke eds., 1995)。具体的には、1970年代に西欧で誕生し、83年に西ドイツ連邦議会に議席を獲得するにいたった環境政党「緑の党」の出現が挙げられる⁴。

ニュー・ポリティクスを定義したもっとも初期にあたる文献で、ポグントケはその特徴として、「争点」「政治参加の様式」「支持者層の特徴」といった3つの点を挙げている（Poguntke, 1987: 77-78）。第一に、何より特徴的なのはその争点であろう。新左翼政党は、環境問題や女性の権利、少数民族といった、既成政党が中心に掲げてこなかった争点をとりあげ、なおかつこれらを単一争点として掲げている点が特徴的である。こうした争点は、既成政党が中心として掲げてきた経済的争点と異なるばかりか、環境問題のように経済成長とはむしろ相容れない争点も含まれている。

第二の政治参加の様式は新左翼政党の組織構造および組織運営に現れている。その組織的特徴として具体的には、反ヒエラルヒー（官僚制）的な組織構造、直接参加民主主義的な組織運営といった点が上げられる。キツェルト（Kitschelt, 1990）は、新左翼政党の組織を分析するなかで、その政党組織が従来の既成政党と比べて組織化の程度が低いことを指摘した。そして、こうした組織の特徴が、党内民主主義の徹底とミヘルスのいう「寡頭制の鉄則」を回避することを目的としていると指摘した。またケルブル（Koelble, 1989）は、ドイツの「緑の党」とイギリスの「社会民主党」を取り上げ、ミヘルスのような「寡頭制の鉄則」はほんとうに不可避なのかどうかを検証している。結果、双方ともに、表面上は「寡頭制の鉄則」を免れていないように見えるが、その組織内部の党員、活動家、幹部という複合的なレベルで検証していくと、「緑の党」はある程度「寡頭制の鉄則」を克服することができたのに対し、イギリスの「社民党」は寡頭制的な傾向を避けきれなかったと述べている。そしてこれらの違いは、それぞれの政党の発生の時の初期要因にあることが明らかにされている。

第三に、支持者層の特徴として、これまでにない争点を掲げる新左翼政党を支持する有権者は、若年層で高学歴の新中産階級に偏っている。こうした支持者層は、イングルハートのいう「脱物質主義的価値観」をもつ有権者層と一致する。また、イングルハートが強く意識していたように、これらの支持者層は、60年代後半から頻発してきた学生運動や社会運動の中心的なアクターとも一致している。このことは、新左翼政党が既存の支配階層や支配構造に対抗的な組織を形成していることにも関係している。

こうした新左翼政党の、政党組織としての新しさを、政党—有権者関係から論じたのがキツェルトの業績である（Kitschelt, 1990）。彼は1980年代から、西ドイツの「緑の党」とベルギーの「エコロ（ワロニー地方）」・「アガレヴ（フランデレン地方）」を取り上げ、これらの政党の134人におよぶ国会議員、地方議員、政党幹部職員、一般職員のインタビューにも

とづいて分析を行ってきた (Kitschelt, 1988; 1989)。こうした新左翼政党の研究業績を踏まえて彼は、政党というのは利益媒介のシステムでもなければ単なる政党競争の道具でもないと断言したうえで、政党の組織構成が、「政党競争の論理」と「支持者代表の論理」という、相反する二つのロジックによって構成されることを指摘した。そして、彼が「左翼リバタリアン政党」と呼ぶ新左翼政党の組織を緻密に分析し、従来の既成政党が「政党競争の論理」によって動いているのに対し、新たに登場してきた新左翼政党は「支持者代表の論理」を優先し、それによって新たな有権者層からの支持を得ることができたと述べている。

このことは、既成政党のうちでより新左翼政党と近い位置にある社会民主主義政党との勢力衰退との関係でも表される。すでにシューンメーカー (Shoonmaker, 1988) はドイツの事例をもとに、社会民主党の中道への路線変更によってできた左翼のスペースに緑の党が入り込み、同時に自由民主党の支持者も取り込んだことを明らかにしている。このことは既成政党の失敗によりドイツ緑の党が支持を拡大させたことを意味している。またキツェルト (Kitschelt, 1994) はのちに、社会民主主義政党の研究も行っている。そこで彼は、社会民主党など既成の左派政党が政権に参加し、エリート間の取り引きによるコーポラティズム型政策形成や官僚的な福祉国家の建設を推進してきたところでは、既成の左派政党に対する反発が強まり、新左翼政党の伸張が見られると指摘している⁵。

さらにキツェルト (Kitschelt, 1997: 135-136) は、新しい政党の出現と台頭のメカニズムを、次のような三段階の図式で表している。第一のレベルでは、新しい政党はまだ誕生せず代わりに既存の政党が新たな有権者の要求や新たな争点に適應して変化を図る。次に第二のレベルでは、新しい政党が登場するものの、政党間のイデオロギー対立図式そのものは変わらない。最後に第三のレベルで、環境問題のような新しい争点を掲げる新しい政党が登場するということのである。要するに、有権者の新たな要求や争点の出現といった変化に対して、既成政党がこれを取り込むことができなかった場合に、新しい政党が登場してきたといえるのである。

また岡田は、この新左翼政党の登場について、「新しいタイプのニュー・ポリティクス政党の伸張は、包括政党化、さらにはカルテル政党化を進める既成政党のあり方に対する反動とも考えられる」(岡田2005: 92) と述べており、変化する有権者に既成政党が適應できなかったばかりでなく、包括政党化やカルテル政党化といった政党の組織変化によって有権者の反感を招いたのだと説明している。

ところがこうした新左翼政党も、ドイツ緑の党をはじめ、90年代以降しだいに「主流派」となっており、近年においては連立政権にも加入している。その結果、当初の直接民主

主義的な組織構造や組織運営に修正を余儀なくされ、当初のラディカルな主張やイデオロギーもより現実的で中道的なものへと変化してきている（Muller-Rommel and Poguntke eds., 2002、とりわけ、Poguntke, 2002を参照）。丸山はこうした変化を、「支持者代表の論理を体現する党」から「徐々に政党競争の論理が浸透してくる過程」と解釈している（丸山2004：209）。そのイデオロギーと組織の両方の点において、新左翼政党は大きく変化してきたといえる。ここに再び、新左翼政党も有権者からの乖離をはじめの契機がみられる。そうした折、今度は新しい右翼政党がさらに勢力を伸張しはじめるのである。

（2）新右翼政党

新右翼政党の台頭は、1980年代中頃からヨーロッパにおいて顕著になってきたといってよいだろう。90年代にはいると、これら「欧州新右翼」（山口・高橋編1998）についての研究が出てきている（ECRP, 1992; Betz, 1994）。そのもっとも代表的なものがフランスの国民戦線である（畑山1997; 2007を参照）。これら新右翼政党にとりわけ重要なのは、その争点と支持構造における特徴であろう。まず争点にかんして、新右翼政党は外国人労働者の排斥や家父長制的権威主義、文化的伝統の強調などの独特の争点を掲げている。ベッツ（Betz, 1994）は、ヨーロッパの新右翼政党に共通してみられる要素として、①経済的自助を本位とするネオリベラリズム、②外国人嫌い、③ルサンチマン（怨恨感情）を挙げている。

また新右翼政党の支持構造の特徴として、それらが「極右ポピュリズム政党」（Betz, 1994）とも呼ばれるように、フランス国民戦線のルペンに代表されるような指導者の個人的人気に依るところが大きい点が挙げられる（Ignazi, 1996: 559）。ローソンが、「もとは社会に安定的に根ざしていた重しを失うことで、政党は、（多くの場合は期せずして）政党政治に対する不満を反映した政治起業家が登場する空間を創り出した・・・相当数のポピュリストがいくつもの民主主義諸国の選挙で成功している事実は、既存政党の脆弱性をあらわしている」（Lawson, 2004: 12）と述べていることは、ポピュリズムの特徴をもつ新右翼政党の登場が、既存政党の脆弱性に起因していることを示唆している。さらに彼女は、「この脆弱性は、利益集約機能の低下、つまり多くの政党がその有権者の不満や要求に適切に反応する能力が低下してきていることと直接に関係している」（ibid）と述べ、ここでいう「既存政党の脆弱性」が、政党の利益代表機能の低下を意味していることを明らかにしている。

同様に、イニャーツィの一連の新右翼政党にかんする研究は、新右翼の掲げる外国人労働者の排斥のような争点の有権者に受け入れられる社会的変化という条件と併せて、既存の右派政党がイデオロギー的に衰退し、また有権者からの固定的な支持を失いつつある中で、ラ

ディカルな保守主義的政治勢力が登場する政治的な条件も、新右翼政党が登場する要因として強調している (Ignazi, 1992; 1996; 1997)。つまり、新左翼政党が既存の左翼政党の支持獲得の失敗によって勢力を拡大してきたのと同じように、新右翼政党も既存の右翼政党の支持獲得の失敗によって台頭してきたといえるのである。

また彼は、こうした新右翼政党の「反政党的政党 (anti-party parties)」(Ignazi, 1996: 561) という性質に注目し、新右翼政党の台頭を「静かなる反革命」(Ignazi, 1992) とも呼んでいる。同様にこうした性質に着目して、新右翼政党を「反政治支配層政党 (anti-political-establishment parties)」(Schedler, 1996) とする議論もある。この点は、新左翼政党の代表であるドイツの緑の党が当初、「反政党的政党 (anti-parteien partei)」として登場し、既存の政党や政治スタイルに反対していたのと類似している。

このように、新右翼政党のポピュリスト的な特徴は、組織としての既成政党のあり方にたいする反対の表れであるとみることができよう。この点において、新右翼政党は、新左翼政党と同じであるということが出来る。ただし、新たな組織形態の試みが、新左翼政党においてはヒエラルキー型組織を否定しフラットな直接民主主義的組織を志向したのに対し、新右翼政党においてはポピュリズム的形態を志向したのだといえよう。

また、ローソンやイニャーツィの指摘にみられるように、有権者—政党関係にみる新型政党発生メカニズムは、新右翼・新左翼ともに同様であることがわかる。たとえば、イニャーツィ (Ingazi, 1996) は、近年議論されてきた「政党の危機」ないし「政党の衰退」から新右翼政党と新左翼政党の出現を説明しようとした。その結果、現代の政党は、それが伝統的に有してきた機能において困難に直面しているとし、そのなかでもとりわけ有権者の意思伝達の機能において困難があるとしている。そしてその結果、新しい社会運動と新左翼政党が登場したのみならず、新右翼政党の台頭も許しているというのである⁶。このように、新型政党の発生メカニズムは、新右翼・新左翼ともども、統一的に説明することが可能である。

以上のように、新左翼政党と新右翼政党は、そのイデオロギーや争点、組織形態といった点においては好対照をなしているものの、有権者—政党関係における発生メカニズムではきわめて類似している。これまでみてきたように、いずれの新型政党も、既成政党が利益代表機能を低下させてきているなかで、有権者からの支持を失い、そうしてできたスペースにこれら新型政党が登場し、有権者からの支持を獲得して勢力を伸張させることができたのである。

おわりに

本稿では、政党が「得票の最大化」を最優先させることによってどのような政党政治の変化が生じてきたのか、その連関について過去の研究蓄積を渉猟し、これを整理することで説明しようとした。そこで本稿ではまず、政党の機能について論じた。ここでは政党の「利益代表機能」と「選挙競争機能」との二つの機能を提示し、このうち「選挙競争機能」が優先されることにより、「利益代表機能」が低下してきていると指摘した。次にいくつかの指標を取り上げ、有権者の（既成）政党離れの現状を提示した。そして最後に、こうした有権者の政党離れが新しい政党の登場や台頭を促したと論じた。

本稿のこうした議論の背景には、「（代議制）民主主義の危機」という問題意識が背景にある。すでに拙稿（金丸2008）でも指摘したように、もともと選挙とは代議制民主主義を支える最も重要な制度であり、ゆえに代議制民主主義のエージェントである政党にとって、選挙での支持獲得が最重要になるのは当然であった。ところが、近年の政党は、選挙での得票最大化を最優先の目的とした結果、それが必ずしも有権者の意思伝達という目的とは合わなくなってきているということが指摘されてきている。こうした政党の機能低下、とりわけ政党の「利益代表機能」の低下によって、有権者の政党離れが進行していると説明されている。こうしたなかで、新しい政党の登場は新たな政党政治の局面を示す出来事であると捉えられている。すなわち、既成政党が代表しない新たな利益や理念のいわば受け皿として、新型政党が登場してきたと捉えられているのである。ところが、環境政党に代表される新左翼政党は、「主流化」が進みまた政権に加入するなかで、当初の新たな組織的試みやめつつあることが指摘されているし、また極右政党などはその争点やイデオロギーそのものが民主主義に適合的であるか疑問視されてもいる。

たしかに近年、情報技術の発達などにより、政党を介した有権者の意思伝達的手段はその独占的な地位を弱めつつある。それにもかかわらず依然、現代の民主主義は政党をメインアクターとした議会制民主主義ないしは代議制民主主義の枠を出ていない。有権者の利益を集約しその意思を伝達する機能をもつ、民主主義のエージェントとしての政党の地位が揺らぎつつあるなかで、政党の役割があらためて問われる理由はそこにある。

文献リスト

<外国語文献>

- ・ Andeweg, Rudy, 1996, "Elite-Mass Linkages in Europe: Legitimacy Crisis or Party Crisis?" in Hayward ed., 1996: 143-163.
- ・ Bartolini Stefano, and Mair, Peter, 2001, "13 Challenges to Contemporary Political Parties," in Diamond and Gunther eds., 2001: Ch. 13.
- ・ Betz, Hans-Georg, 1994, *Radical Right-wing Populism in Western Europe*, New York: St. Martin's Press.
- ・ Biezen, Ingrid van and Kopecky, Petr, 2007, "The State and Parties: Public Funding, Public Regulation and Rent-Seeking in Contemporary Democracies," *Party Politics*, Vol. 13, No. 2, pp. 235-254.
- ・ Biorcio, Roberto and Mannheim, Renato, 1995, "Relationships between Citizens and Political Parties," in Klingemann and Fuchs eds., 1995: 206-226.
- ・ Broughton, David and Donovan, Mark eds., 1999, *Changing Party Systems in Western Europe*, London: Pinter.
- ・ Daalder, Hans, 2002, "Parties Denied, Dismissed, or Redundant? A Critique," in Gunther, Montero and Linz eds., 2002: 39-57.
- ・ Daalder, Hans and Peter Mair eds., 1983, *Western European Party Systems: Continuity and Change*, London, Sage.
- ・ Daalder, Hans, 1992, "A Crisis of Party?," *Scandinavian Political Studies*, Vol. 15, pp. 269-288.
- ・ Dalton, Russell J., 2002, *Citizen Politics*, Chatham, NJ: Chatham House.
- ・ Dalton, Russell J. and Wattenberg, Martin P. eds., 2000, *Parties Without Partisans: Political Change in Advanced Industrial Democracies*, Oxford: Oxford University Press.
- ・ Dalton, Russell J., 2000, "The Decline of Party Identifications," in Dalton and Wattenberg eds., 2000: Ch. 2.
- ・ Dalton, Russell J., McAllister, Ian and Wattenberg, Martin P., "The Consequences of Partisan Dealignment," in Dalton and Wattenberg eds., 2000: Ch. 3.
- ・ Dalton, Russell J. and Martin P. Wattenberg, 2000b, "Partisan Change and the Democratic Process," in Dalton and Wattenberg eds., 2000, Ch.12.
- ・ Dalton, Russell J., 1999, "Political Support in Advanced Industrial Democracies," in Norris

- ed., 1999.
- ・ Dalton, Russell J. and Kuechler, M. eds., 1990, *Challenging the Political Order: New Social and Political Movements in Western Democracies*, New York: Oxford University Press.
 - ・ Dalton, Russel J., Scott Flanagan, Paul Allen Beck eds. 1984, *Electoral Change in Advanced Industrial Democracies: Realignment or Dealignment?*, Princeton: Princeton University Press.
 - ・ Dalton, Russell J., Flanagan, Scott C. and Beck, Alan, 1984, "Electoral Change in Advanced Industrial Democracies," in Dalton, Flanagan and Beck eds., 1984: Ch. 1 .
 - ・ Deth, Jan van ed., 1998, *Comparative Politics: The Problem of Equivalence*, London: Routledge.
 - ・ Diamond, Larry and Gunther, Richard eds., 2001, *Political Parties and Democracy*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
 - ・ ECPR (European Journal of Political Research) , 1992, *Extreme Right-wing Parties in Europe*, Volume 22, No. 1 , Special Issue.
 - ・ Farrel, David M. and Webb, Paul, 2000, "Political Parties as Campaign Organizations," in Dalton and Wattenberg eds., 2000: Ch. 6 .
 - ・ Gunther, Richard, Montero, Jose Ramon, and Linz, Juan eds., 2002, *Political Parties: Old Concepts and New Challenges*, Oxford: Oxford University Press.
 - ・ Gunther, Richard and Diamond, Larry, 2001, "Types and Functions of Parties," in Diamond and Gunther eds., 2001: Ch. 1 .
 - ・ Hayward, Jack ed., 1996, *Elitism, Polulism, and European Politics*, Oxford: Clarendon Press.
 - ・ Ignazi, Piero, 1997, "New Challenges: Post-Materialism and the Extreme Right," in Rhodes, Heywood and Wright eds. 1997.
 - ・ Ignazi, Piero, 1996, "The Crisis of Parties and the Rise of New *Political Parties*," *Party Politics*, Vol. 2 , Oct., 1996, pp. 569-585.
 - ・ Ignazi, Piero, 1992, "The Silent Counter-revolution: Hypothesis on the Emergence of Extreme Right-wing parties in Europe," *European Journal of Political Research*, vol.22, pp. 3-34.
 - ・ Inglehart, Ronald, 1997, *Modernization and Postmodernization: Culture, Economic, and*

Political Change in 43 Societies, Princeton: Princeton University Press.

- ・ Inglehart, Ronald, 1990, *Culture Shift in Advanced Industrial Society*, Princeton: Princeton University Press. 村山皓、富沢克、武重雅文訳『カルチャーシフトと政治変動』東洋経済新報社、1993。
- ・ Inglehart, Ronald, 1977, *The Silent Revolution: Changing Values and Political Styles among Western Publics*, Princeton: Princeton University Press. 三宅一郎・金丸輝男・富沢克訳『静かなる革命—政治意識と行動様式の変化—』東洋経済新報社、1978。
- ・ Inglehart, Ronald, 1971, "Silent Revolution in Europe: Intergenerational Change in Post Industrial Societies", *American Political Science Review*, Vol. 65, pp. 991-1017.
- ・ Jahn, Detlef, 1993, "The Rise and Decline of New Politics and the Greens in Sweden and Germany: Resource Dependence and New Social Cleavages," *European Journal of Political Research*, Vol.24, pp. 177-194.
- ・ Katz, Richard S. and Mair, Peter, 1995, "Changing Models of Party Organization and Party Democracy: The Emergence of Cartel Party," *Party Politics*, Vol. 1, No. 1, pp. 5-28.
- ・ Katz, Richard S. and Mair, Peter eds., 1994, *How Parties Organize: Change and Adaptation in Party Organization in Western Democracies*, London: Sage Publications, 1994.
- ・ Katz, Richard et.al., 1992, "The Membership of Political Parties in European Democracies 1960-1990," *European Journal of Political Research*, Vol 22, pp. 329-345.
- ・ Kitschelt, Herbert, 2000, 'Citizens, Politicians, and Party Cartellization: Political Representation and State Failure in Post-Industrial Democracies', *European Journal of Political Research* 37, pp. 149-79.
- ・ Kitschelt, Herbert and McGann, A.J., 1997, *The Radical Right in Western Europe: A Comparative Analysis*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- ・ Kitschelt, Herbert, 1997, "European Party Systems: Continuity and Change," in Rhodes, Heywood and Wright eds., 1997.
- ・ Kitschelt, Herbert, 1994, *The Transformation of European Social Democracy*, New York: Cambridge University Press.
- ・ Kitschelt, Herbert, 1990, "New Social Movement and the Decline of Party Organization," in Dalton and Kuechler eds., 1990, pp. 179-208.

- ・ Kitschelt, Herbert, 1989, *The Logic of Party Formation: Structure and Strategy of Belgian and German Ecology Parties*, Ithaca: Cornell University Press.
- ・ Kitschelt, Herbert, 1988, "Organization and Strategy of Belgian and West German Ecology Parties: A New Dynamic of Party Politics in Western Europe?," *Comparative Politics*, Vol.20, No. 2, 1988.
- ・ Klingemann, Hans-Dieter and Fuchs, Dieter eds., 1995, *Citizens and the State*, Oxford: Oxford University Press.
- ・ Koelble, Thomas A., 1989, "Party Structures and Democracy," *Comparative Political Studies*, Vol.22, No. 2, pp. 199-216.
- ・ Koole, Rund, 1996, "Cadre, Catch-all or Cartel? A Comment on the Notion of the Cartel Party", *Party Politics*, Vol. 2, No. 4, pp. 507-523.
- ・ Koole, Rund, 1994, "The Vulnerability of the Modern Cadre Party in the Netherlands," in Katz and Mair eds., 1994.
- ・ Lawson, Kay and Poguntke, Thomas eds., 2004, *How Parties Respond: Interest Aggregation Revisited*, London: Routledge.
- ・ Lawson, Kay, 2004, "Five Variations on a Theme: Interest Aggregation by Party Today," in Lawson and Poguntke eds., 2004: Ch. 12.
- ・ Lawson, Kay and Peter H. Merkl eds. 1988, *When Parties Fail : Emerging Alternative Organizations*, Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- ・ Lawson, Kay, 1988, "When Linkage Fails," in Lawson and Merkl eds. 1988: Ch. 2.
- ・ Lawson, Kay ed., 1980, *Political Parties and Linkage: A Comparative Perspective*, New Haven: Yale University Press.
- ・ Lawson, Kay, 1968, *Political Parties and Democracy in the U.S.*, New York: Charles Scribner's Sons.
- ・ Lawson, Kay and Thomas Poguntke eds., 2004, *How Parties Respond: Interest Aggregation Revisited*, London: Routledge.
- ・ Linz, Juan, 2002, "Parties in Contemporary Democracies: Problems and Paradoxes," in Gunther, Montero and Linz eds., 2002.
- ・ Mair, Peter, 1998, "Representation and Participation in the Changing World of Party Politics," *European Review*, Vol. 6, pp. 161-174.
- ・ Mair, Peter and Ingrid van Biezen, 2001, "Party Membership in Twenty European

- Democracies, 1980-2000," *Party Politics*, Vol. 7, Jan., 2001, pp. 5-21.
- Mair, Peter and Smith, Gordon, eds., 1990, *Understanding Party System Change in Western Europe*, London: Frank Cass.
 - Mayer, Margit and John Ely eds. 1998, *The German Greens: Paradox between Movement and Party*, Philadelphia: Temple University Press.
 - Mewes, Horst, 1998, "A Brief History of the German Green Party," in Mayer and Ely eds. 1998: Ch. 2.
 - Muller-Rommel, Ferdinand and Poguntke, Thomas eds., 2002, *Green Parties in National Governments*, London: Frank Cass & Co.
 - Muller-Rommel, Ferdinand and Thomas Poguntke eds., 1995, *New Politics*, Aldershot: Dartmouth Publishing Co..
 - Muller-Rommel, Ferdinand eds., 1989, *New Politics in Western Europe: The Rise and Success of Green Parties and Alternative List*, Boulder: Westview Press.
 - Norris, Pippa ed., 1999, *Critical Citizens: Global Support for Democratic Governance*, Oxford: Oxford University Press.
 - Panebianco, Angelo, 1988, *Political Parties : Organizations and Power* (trans. by Mark Silver) , Cambridge : Cambridge University Press. 村上信一郎訳『政党－組織と権力－』ミネルヴァ書房, 2005.
 - Pedersen, Karina, 2004, "From Aggregation to Cartel? The Danish Case," in Lawson and Poguntke eds., 2004: Ch. 5.
 - Pharr, Susan J. and Putnam, Robert D. eds., 2000, *Disaffected Democracies: What's Troubling the Bilateral Countries?*, Princeton: Princeton University Press..
 - Pennings, Paul and Jan-Erik Lane eds., 1998, *Comparing Party System Change*, London: Routledge.
 - Poguntke, Thomas, 2004, "Do Parties Respond? Challenges to Political Parties and Their Consequences," in Lawson and Poguntke eds., 2004: Ch. 1.
 - Poguntke, Thomas, 2002, "Green Parties in National Governments: From Protest to Acquiescence?," in Muller-Rommel and Poguntke eds., 2002: Ch. 7.
 - Poguntke, Thomas, 1998, "Party Organizations," in Deth ed., 1998.
 - Poguntke, Thomas, 1996, "Anti-Party Sentiment: Conceptual Thoughts and Empirical Evidence Explorations into a Minefield," *European Journal of Political Research*, Vol. 29,

pp. 319-344.

- ・ Poguntke, Thomas, 1987, "New Politics and Party Systems : The Emergence of a New Type of Party?" *West European Politics*, Vol. 10, No. 1 , pp. 76-88.
- ・ Reiter, Howard L., 1989, "Party Decline in the West: A Skeptic' s View," *Journal of Theoretical Politics*, Vol. 1 , pp. 325-348.
- ・ Rhodes, Martin Heywood, Paul and Wright, Vincent eds. 1997, *Developments in West European Politics*, London: Macmillan.
- ・ Rosenstone, Steven J. and Hansen, John Mark, 1993, *Mobilization, Participation, and Democracy in America*, New York: MacMillan.
- ・ Scarrow, Susan E., 2000, "Parties without Members? Party Organization in a Changing Electoral Environment," in Dalton and Wattenberg eds., 2000: Ch. 5 .
- ・ Scarrow, Susan E., Paul Webb, and David M. Farrell, 2000, "From Social Integration to Electoral Contestation," in Dalton and Wattenberg eds., 2000: Ch. 7 .
- ・ Schedler, Andreas, 1996, "Anti-Political-Establishment Parties," *Part Politics*, Vol. 2 , pp. 291-312.
- ・ Schumidt, Hermann and Holmberg, Soren, 1995, "Political Parties in Decline?", in Klingemann and Fuchs eds., 1995: Ch. 4 .
- ・ Selle, Per and Svasand, Lars, 1991, "Membership in Party Organizations and the Problem Decline of Parties," *Comparative Political Studies*, Vol. 23, pp. 459-477.
- ・ Todosijevic, Bojan and Enyedi, Zsolt, 2003, "Structure versus Culture Again: Corporatism and the "New Politics" in 16 Western *European Countries*," *European Journal of Political Research*, Vol. 42, Issue 5 , pp. 629 - 642.
- ・ Vedung, Evert, 1988, "The Swedish Five-Party Syndrome and the Environmentalists," in Lawson and Merkl eds., 1988: Ch. 4 .
- ・ Wattenberg, Martin P., 2000, "The Decline of Party Mobilization," in Dalton and Wattenberg eds., 2000: Ch. 4 .
- ・ Wattenberg, Martin P., 1986, *The Decline of American Political Parties, 1952-1984*, Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- ・ Webb, Paul, 2002, "Introduction: Political Parties in Advanced Industrial Democracies," in Webb, Paul, Farrell, David M., and Holliday, Ian, eds., 2002: Ch. 1 .
- ・ Webb, Paul, 2002b, "Conclusion: Political Parties and Democratic Control in Advanced

Industrial Societies,” in Webb, Paul, Farrell, David M., and Holliday, Ian, eds., 2002: Ch. 15.

- ・ Webb, Paul, Farrell, David M., and Holliday, Ian eds., 2002, *Political Parties in Advanced Industrial Democracies*, Oxford: Oxford University Press.
- ・ Widfeldt, Anders, 1995, “Party Membership and Party Representativeness,” in Klingemann and Fuchs eds., 1995: Ch. 5.

<日本語文献>

- ・ 岡田浩 (2005) 「現代政治の変容と政党論の再構築」 賀来健輔、丸山仁編『政治変容のパー
ースペクティブ—ニュー・ポリティクスティクスの政治学Ⅱ』 ミネルヴァ書房：第4章。
- ・ 金丸裕志 (2008) 「政党の定義と組織モデルの変化をめぐる考察—政党の目的における『得
票の最大化』と有権者からの乖離—」 『和洋女子大学紀要 (人文系編)』 第48集、33-49頁。
- ・ 金丸裕志 (2006) 「社会の変化と政党システムの変容」 出水薫、金丸裕志、八谷まち子、
椛島洋美編『先進社会の政治学—デモクラシーとガバナンスの地平—』 法律文化社、
21-52頁。
- ・ 金丸裕志 (1997) 「価値観変化と政治変動—R・イングルハートの理論枠組み—」 『政治研
究』 第44号、41-96頁。
- ・ 畑山敏夫 (2007) 『現代フランスの新しい右翼—ルペンの見果てぬ夢—』 法律文化社。
- ・ 畑山敏夫 (1997) 『フランス極右の新展開—ナショナル・ポピュリズムと新右翼—』 国際
書院。
- ・ 的場敏博 (2003) 『現代政党システムの変容—90年代における危機の深化—』 有斐閣。
- ・ 丸山仁 (2004) 「社会運動から政党へ?—ドイツ緑の党の成果とジレンマ—」 大畑裕嗣、
成元哲、道場親信、樋口直人編『社会運動の社会学』 有斐閣：第10章。
- ・ 三船毅 (2005) 「投票参加の低下—90年代における衆議院選挙投票率低下の分析—」 日本
政治学会編『市民社会における参加と代表 (年報政治学2005— I)』 木鐸社。
- ・ 山口定・高橋進編 (1998) 『ヨーロッパ新右翼』 朝日新聞社。

註

- 1 ワッテンバーグは、アメリカの政党政治を検証するなかで、11にのぼる政党の機能を取り上げ
ている (Wattenberg, 1986: 1-2)。また、ダールトンとワッテンバーグは、「選挙民のなかの
政党」「組織としての政党」「政府のなかの政党」という有名なキイの3分野の枠組みに沿って、

- 15にのぼる政党の機能を挙げている（Dalton and Wattenberg eds., 2000）
- 2 彼らはその編著書の中で、こうした新しい政党や利益集団として、環境問題組織・補完的組織・共同体主義組織・権威主義的組織という4種類を取り上げ、各国におけるこれらの事例を個別に紹介している。
 - 3 「新右翼」の呼び方にかんしては、山口・高橋編1998：序章を参照。この「新右翼」という呼び方にあわせて、ここでは「新左翼」とした。
 - 4 ドイツ「緑の党」にかんしては、80年代を中心に分析した研究としてミュラー＝ロメルの研究（Muller-Rommel, eds., 1989）、形成から90年代までの歴史を取り上げた研究（Mewes, 1998）、またその思想から組織まで包括的に取り上げた共同研究（Mayer and Ely eds., 1998）を参照した。また、スウェーデン緑の党にかんしてヴェドゥングの研究（Vedung, 1988）、ドイツとスウェーデンの比較としてジャーンの研究を参照（Jahn, 1993）。
 - 5 同様に、コーポラティズム的な、既成政党や利益団体を中心とした政策形成過程が一般有権者に閉塞感をもたらし、その結果、新左翼政党の支持が増大しているという指摘がある（Todosijevec and Enyedi, 2003）。
 - 6 またキツェルトは、新左翼政党や社会民主主義政党の研究に続けて新右翼政党の登場についても研究を行っている（Kitschelt and McGann, 1997）。また、すでに社会民主主義政党の研究の中で、従来の左翼—右翼の政党分類次元に加え、リバタリアン—権威主義というもう一つの次元を加えて、「左翼リバタリアン」としての新左翼政党に対し、「右翼権威主義」政党が対峙することを示している。ここにいう右翼権威主義政党が新右翼政党と同義であるか否かにかんしては検討が必要であるが、新右翼政党と新左翼政党を統一的に捉える試みであるといえる。

